

令和 3 年 6 月 11 日現在

機関番号：28001

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K04848

研究課題名(和文)総合的な学習における文化的アイデンティティの形成過程：学習内容との関連から

研究課題名(英文)The process of constructing cultural identity in integrated learning

研究代表者

城間 祥子(Shiroma, Shoko)

沖縄県立芸術大学・音楽学部・准教授

研究者番号：30457379

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、総合的な学習の時間における学習過程について、「認識論な学び」と「存在論的な学び」の二つの側面からアプローチし、両者の関係について検討した。具体的には、伝統や文化をテーマとした学習活動に焦点を当て、学習内容(学習者がどのような知識や技能を学んでいるか)から認識論的な学びの過程をとらえた。また、学習対象の伝統や文化を維持・継承しているコミュニティに対して自己をどのように位置づけるか(文化的アイデンティティ)という観点から、存在論的な学びの過程を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、職業的アイデンティティの発達研究で用いられている状況的学習論の「実践共同体への参加」の枠組みを、文化的アイデンティティの発達研究に応用したことである。これにより、文化的アイデンティティを固定したものとしてではなく、実践共同体との交渉を通して構成され続ける動的な過程として描くことが可能となった。また、総合的な学習の時間における学びの過程と、学びを構造化する学習環境の検討を通して、総合的な学習の意義をより明確にするとともに、カリキュラム・デザインや学習指導上の留意点を提示することができた。

研究成果の概要(英文)：In this study, we approached the process of integrated learning in Japanese schools from two aspects, "epistemological learning" and "ontological learning," and examined the relationship between the two. Specifically, we focused on learning activities on the theme of tradition and culture, and viewed the epistemological learning process from the perspective of what kind of knowledge and skills the students are learning. In addition, we clarified the ontological learning process in terms of how they position themselves in relation to the community that maintains and inherits the traditions and culture they are learning about.

研究分野：教育心理学

キーワード：総合的な学習の時間 伝統・文化の教育 状況的学習論 パフォーマンス心理学

1. 研究開始当初の背景

総合的な学習の時間においては、横断的・総合的な学習や探究的な学習を通して、資質や能力を育成するとともに、学び方やものの考え方を身につけ、主体的・創造的・協働的に取り組む態度を育てること、自己の生き方を考えることができるようにすることが目指されている（文部科学省，2008）。総合的な学習で求められているのは、知を広げ統合する「認識論的な学び」とともに、自己を形成する「存在論的な学び」であるといえよう。

認識論的な学びについては、全国学力・学習状況調査や、日本生活科・総合的学習教育学会が実施した大規模な調査（村川ら，2015）により、総合的な学習の時間が学力向上や汎用的な資質・能力の育成に資することが実証的に示されつつある。一方、存在論的な学びに関しては、授業の中で教師が見取った子どもの姿として多数の事例報告があるものの、実証的な研究はまだ少ない（高橋，2010）。また、認識論的な学びと存在論的な学びの関係についても解明されていない。そこで、本研究では、総合的な学習の時間における「認識論的な学び」とともに「存在論的な学び」の過程を明らかにし、両者の関係について検討することを目指した。

認識論的な学びと存在論的な学びの両方の学習過程をとらえるため、本研究では伝統や文化に関する学習活動に着目した。伝統や文化に関わる内容は各教科でも学習するが、総合的な学習の時間ではそれらを統合したり、教科にはない内容を扱ったりする。学習内容に注目することで認識論的な学びをとらえることができる。また、学習対象の伝統や文化を維持・継承しているコミュニティに対して自己をどのように位置づけるか（文化的アイデンティティ）という観点から、存在論的な学びの過程にも迫ることができる。

アイデンティティは、自分自身の内的な斉一性・連続性と、それが他者からも認められ、社会の中で位置づけられている感覚から構成される。近年は、アイデンティティは個人と文脈（他者・社会・文化など）との相互作用の中で現れ、発達するという考え方が研究者の中で共有されてきている（杉村，2008）。亀井（2006）や豊田（2015）は、状況的学習論における「実践共同体への参加」の枠組みから個人と文脈の相互作用をとらえ、職業的アイデンティティの形成プロセスを明らかにしている。実践共同体への参加とは、①学習者の知識・技能の変化、②周囲の人々や人工物と学習者の関係の変化、③学習者自身の自己理解（アイデンティティ構築）の変化の3つの局面が相互に関連した生成的な過程である（Lave & Wenger, 1991; 高木, 1999）。「実践共同体への参加」という枠組みは、職業的アイデンティティの発達に限らず、総合的な学習における文化的アイデンティティの形成過程を学習内容との関連から明らかにする際にも有効だと考えられる。

2. 研究の目的

総合的な学習の時間における「認識論的な学び」と「存在論的な学び」の過程を明らかにする。特に伝統や文化の学習に焦点を当て、学習者がどのような知識や技能を学んでいるのかを分析する。また、同時に生じる学習者のアイデンティティ形成過程を、学習対象となっている知識や技能を保持・継承している実践共同体への参加過程として記述する。これらの分析を通して、総合的な学習の時間における存在論的な学びの過程について実証的な研究を発展させるとともに、存在論的な学びを深める学習環境やカリキュラムの設計に関して実践上の手がかりを提示する。

3. 研究の方法

アイデンティティ概念の理論的検討を行うとともに、伝統・文化の教育に関する実践事例の収集と分析、伝統・文化教育を中心とした教科横断的カリキュラムの現地調査を行った。

4. 研究成果

(1) 文化的アイデンティティの構築過程

状況的学習論においては、アイデンティティの発達は実践共同体への参加の一側面と位置づけられ、知識や技能の獲得とアイデンティティの発達は分かち難く結びついていることが指摘されてきた（Lave & Wenger, 1991; Wenger, 1998）。しかし、アイデンティティの構築は、より十全に実践共同体に参加する方向にばかり進むわけではない。共同体から距離を取る「非同一化」もまたアイデンティティの一つの実践である（Hodges, 1998）。伝統・文化教育の「教材」と学習者の関係づけを分析すると、多くの実践は、生徒が属する共同体の内部で自らの足元を深く掘っていくような学びを要請するものであった。その中でより十全な参加者となっていくことも、共同体から距離をとることも、等しくアイデンティティ構築の過程とみなすことができる。さらに、アイデンティティを「アイデンティティをもっている」とみなされるような、ある種の社会的な『状態』にある」（岸，2013）ことだととらえるならば、アイデンティティの構築には、「アイデンティティが問題となるような社会的関係」への埋め込みが不可欠である。

(2) 「共変移」としてのアイデンティティの発達

学校から地域へと向かう発達的变化について、「共変移（consequential transition）」（Beach, 2004）の概念を手がかりに検討した。共変移は、側方変移、相互変移、包含変移、媒介変移の4

つの類型に区別される。地域の伝統や文化に関わる教材を活用した学習活動の多くが媒介変移に分類された。媒介変移とは、例えばバーテンダー養成所での職業教育のような、「まだ十分に経験されていない活動への参加を見積もり模擬するような教育的活動内で起こる」変化をいう。媒介変移の経験を通して、生徒は地域について認識を深めていたが、自身が地域の文化の「継承者」であるという感覚を持てたかという点では疑問が残った。しかし、一部ではあるが、生徒が外部へ情報発信したり、誰かに教えたりする活動が組み込まれた実践も行われていた。これらの活動の中で、生徒は「アイデンティティが問題となるような社会的関係」に埋め込まれる。継承者として振る舞う場は、自分が何者であるかを問い直す契機になると考えられる。

(3) 教科における学びとの比較

伝統文化教育を中心としたカリキュラム開発に取り組む中学校において、教科の枠の中で実践された伝統文化に関する授業の観察および実践事例の分析を行った。実践事例を共同体との関係という視点から分類すると、①既存の共同体への参加を促す実践、②文化比較や境界横断を意図した実践、③共同体の再生産や新たな文化の創造に関わる実践に分類できた。①は主に国語、音楽、美術、保健体育、家庭、②は主に社会、英語、道徳、③は主に社会での実践事例であった。教科における学びを伝統文化教育と関連させやすい教科がある一方で、数学、理科、技術では、導入部や発展的内容として伝統文化に関する事項を取り入れているものの、教科の目標との関連づけに苦心の跡が見られた。また、教科での実践の多くが「日本の伝統や文化」の水準で共同体の境界を設定しており、「地域の伝統や文化」を扱うことの多い総合的な学習の時間とは想定している共同体に違いが見られた。

(4) パフォーマンス心理学における発達概念の導入

パフォーマンス心理学の「発達を導く学習」というアイデアを手がかりに、総合的な学習における学びについて検討した。パフォーマンス心理学は、状況的学習論と同じくヴィゴツキーに思想的な起源をもつ発達理論である。パフォーマンス心理学では、ヴィゴツキーの「発達の最近接領域」を、発達の最近接領域を演じる舞台を人々が協働的に作りあげることが発達をもたらすという弁証法的な関係と解釈する (Holzman, 2009)。「発達を導く学習」は、やり方を知らないことをパフォーマンスする環境を協働的に創造することと表裏一体の関係にある。パフォーマンス心理学の観点を取り入れると、探究的な学習とは、たとえ探究のやり方わからなくとも、子どもたちが他者ととともに (他者の助けを借りながら) 探究という新しいパフォーマンスを創造する過程とみなすことができる。伝統や文化の教育では既存のコミュニティの再生産が強調される傾向にあるが、パフォーマンス心理学の発達概念を導入することで、「発達の最近接領域」を創造する学びの場として意味づけ直すことができるだろう。

<引用文献>

- Beach, K. (2004) 「共変移：社会的組織化による知識とアイデンティティの増殖としての一般化」 石黒広昭編著『社会文化的アプローチの実際：学習活動の理解と変革のエスノグラフィー』北大路書房
- Hodges, D. C. (1998) Participation as dis-identification with/in a community of practice. *Mind, Culture, and Activity*, 5(4), 272-290.
- Holzman, L. (2009) *Vygotsky at work and play*. London: Routledge.
- 亀井美弥子 (2006) 「職場参加におけるアイデンティティ変容と学びの組織化の関係：新人の視点から見た学びの手がかりをめぐって」『発達心理学研究』17(1), 14-27.
- 岸 政彦 (2013) 『同化と他者化：戦後沖縄の本土就職者たち』ナカニシヤ出版
- Lave, J. & Wenger, E. (1991) *Situated Learning: Legitimate Peripheral Participation*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 文部科学省 (2008) 『小学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編』東洋館出版社
- 村川雅弘・久野弘幸・野口 徹・三島晃陽・四ヶ所清隆・加藤 智・田村 学 (2015) 「総合的な学習で育まれる学力とカリキュラム I (小学校編)」『せいかつか&そうごう』22, 12-21.
- 杉村和美 (2008) 「アイデンティティ」『児童心理学の進歩』47, 111-137.
- 高木光太郎 (1999) 「正統的周辺参加論におけるアイデンティティ構築概念の拡張：実践共同体間移動を視野に入れた学習論のために」『東京学芸大学海外子女教育センター研究紀要』10, 1-14.
- 高橋亜希子 (2010) 『高校総合学習の学習過程に関する研究：卒業研究における学習と自己形成の関連』博士論文 (東京大学)
- 豊田 香 (2015) 「専門職大学院ビジネススクール修了生による生涯学習型職業的アイデンティティの形成：TEA 分析と状況的学習論による検討」『発達心理学研究』26(4), 344-357.
- Wenger, E. (1998) *Communities of practice: Learning meaning and identity*. Cambridge: Cambridge University Press.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 郡司菜津美, 岡部大介, 青山征彦, 広瀬拓海, 広瀬拓海, 城間祥子, 渡辺貴裕, 奥村高明
2. 発表標題 学習と発達のパフォーマンス化 『パフォーマンス心理学入門』 + 『みんなの発達!』を素材として
3. 学会等名 日本教育心理学会第61回総会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 永井大円, 城間祥子
2. 発表標題 成人期における英語学習の継続理由に関する質的研究
3. 学会等名 日本教育心理学会第61回総会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 城間祥子
2. 発表標題 伝統・文化教育における学習者のアイデンティティ
3. 学会等名 日本発達心理学会第31回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 城間祥子
2. 発表標題 伝統・文化教育における地域アイデンティティの発達
3. 学会等名 日本発達心理学会第32回大会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 フレド・ニューマン、フィリス・ゴールドバーグ(著)、茂呂雄二、郡司菜津美、城間祥子、有元典文(訳)	4. 発行年 2019年
2. 出版社 新曜社	5. 総ページ数 224
3. 書名 みんなの発達！ ニューマン博士の成長と発達のガイドブック	

1. 著者名 能智正博、香川秀太、川島大輔、サトウタツヤ、柴山真琴、鈴木聡志、藤江康彦(編)	4. 発行年 2018年
2. 出版社 新曜社	5. 総ページ数 432
3. 書名 質的心理学辞典	

1. 著者名 青山征彦、茂呂雄二、五島史子、広瀬拓海、香川秀太、田島充土、臼井東、城間祥子、村野井均、守下奈美子、岩木穰、太田礼穂	4. 発行年 2018年
2. 出版社 サイエンス社	5. 総ページ数 237(146-168)
3. 書名 スタンダード学習心理学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------